



女性が活躍できる建設業を目指して

大熊 汐里

「けんせつ小町」は建設業界で働くすべての女性の愛称である。

男社会というイメージが強かった建設業界だが、近年、この「けんせつ小町」は飛躍的に増えている。なぜ、けんせつ小町は増えているのか。その理由として、“職場環境が変化していること”が挙げられる。

本稿では、筆者が所属するけんせつ小町工事チームの活動と、職場環境について紹介する。

(けんせつ小町工事チーム：けんせつ小町を広く知ってもらうための日建連の登録制度)

キーワード：けんせつ小町、海洋土木

1. はじめに

「けんせつ小町」は建設業界で働くすべての女性の愛称である。

男社会というイメージが強かった建設業界だが、近年、この「けんせつ小町」は飛躍的に増えている。また、筆者自身も土木工事の仕事に携わる「けんせつ小町」である。

なぜ、けんせつ小町が増えてきているのか。

大きなモノづくりをしたい、人の心に残るようなものをつくりたいなど、建設業界を選択する動機は各々あると思う。しかし、女性の建設業就業者が増えてきている最大の理由として、“職場環境が変化していること”が一番に挙げられると筆者は考える。

本稿では、筆者が所属するけんせつ小町工事チーム「気仙沼ほやガールズ」の取り組みと職場環境について紹介したい。これらから、土木工事の魅力を知って貰えたら幸いである。

2. 気仙沼ほやガールズの取り組み

けんせつ小町工事チーム「気仙沼ほやガールズ」は、宮城県気仙沼市の弊社工事事務所に勤める女性で構成されている。

宮城県気仙沼市は、2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震に起因する津波と火災によって、壊滅的な被害をうけた。震災から7年たった今も、早急な災害復旧・復興が求められているところである。

また、筆者は気仙沼市内の造船施設の建設工事を担

当している。東北有数の水産都市であった気仙沼市の水産業を支える造船施設は津波被害を受け、水産関連の復旧が遅延した。津波被害の教訓に基づき、“津波に強い”新たな津波対応型造船施設を建設しているところである（写真—1, 2）。



写真—1 みらい造船完成イメージパース



写真—2 現場状況写真（2018年8月22日撮影）

仕事内容は、主に海上工事の施工管理である。簡単に言えば、作業員さんの監督兼マネージャーのような立ち位置であろう。例として、朝礼の司会進行、日々の打ち合わせの資料作成、作業内容の写真管理、測量等、業務内容は多岐に渡る（写真—3～6）。

また、土木工事で働く女性技術者として、みらいの「けんせつ小町」に海上土木の魅力伝えることを目的として発足されたのが、「気仙沼ほやガールズ」である。朝礼看板にけんせつ小町の垂れ幕を掲示、また、

職員、協力会社の方々にけんせつ小町ステッカーの配布を行い、女性活躍のPR活動を行っている（写真—7、8）。

3. 建設業で働くイメージ

現場の施工管理を主な業務としているので、朝礼から作業終了まで基本的に現場にいる。現場での作業は、日々様々な変化があるので、見ていて楽しい。その反



写真—3 朝礼の司会進行



写真—6 事務作業風景



写真—4 打ち合わせ風景



写真—7 けんせつ小町 垂れ幕



写真—5 測量風景



写真—8 けんせつ小町 マークステッカー

面、気候に左右される環境のため、きついと感じる部分があるのも正直な気持ちだ。

では、学生時代に抱いていた建設業“現場で働く”イメージと、それに対して実際に働いてみて感じたことを挙げていこうと思う。

(1) 職員、作業員ともに男性しかいない

圧倒的な男性社会であることに変わりはないが、日々の業務に関して、筆者自身、大きな問題点は考えられなかった。むしろ、女性が現場にいることが、物珍しく思う作業員さんも多く、気さくに話しかけてくれる印象のほうが強い（写真—9）。



写真—9 現場状況

また、定期的に女性交流の場を設けていただけなので、周りに相談しづらいことも、ため込まずに消化できる環境が整っているように感じる。

(2) 労働時間が長い

現状、労働時間が長いのは確かで、日中は現場での業務、作業終了後は事務所に戻って事務仕事を行う日々である。時に、きつく感じることもあるが、先輩方のサポートと、構造物が出来上がり、進捗を実感できるので、日々頑張ることができる。

また、本現場では、統一土曜閉所運動といって毎月第二土曜日に現場全体で休工日を設けている。このように、建設業界全体で労働時間を減らしていこうという働き方改革が着々と進んでいるので、今後も期待したいところである。

(3) 日焼けがすごい

実は、筆者はこの“日焼け”を一番気にしていた…。作業中はヘルメットを着用しているが、このヘルメット紐の顎紐焼けをするのが嫌だったのである。しかし、

最近の日焼け対策グッズは、透明顎紐や、紫外線マスクなど、様々なものがある。これを併用して、夏を乗り越えることができた。なお、これが今年の夏を乗り越えた、現場スタイルである（写真—10）。

他にも、工事現場には、女性専用のトイレが設置しているので、現場にいてもトイレに困ることはない。また、総括事務所も、広く清潔感あふれる事務所であり、女性専用の休憩スペース兼更衣室も完備されている（写真—11, 12）。



写真—10 日焼け対策



写真—11 女性専用トイレ



写真—12 休憩スペース

筆者自身、本現場が初めての現場であるため、一概には言えないが、学生時代に建設業に対して抱いていたイメージと、ギャップを感じることは少なく、むしろ、“学生時代に抱いていたイメージよりも、工事現場には女性が働きやすい環境が整っている”というのが率直な感想である。

4. 土木工事の魅力

なぜ、建設業を選んだの？

必ずと言ってよいほど、初めて会う人に聞かれる。恐らく、女性なのになぜ？という意味が込められているのだろう。

筆者自身、東日本大震災からインフラ構造物が人々の生活に与える影響・重要性を身をもって経験した。災害に強いモノづくりを通じて、周りの大切な人たちを守りたい、そう考えて建設業を志望した。

“女性だから”とか、“建設業は男社会だから”とかは関係ないように思う。自分が“やりたい”と思う方向へ進んできた結果が今なのだから。

現場で働いてみて、辛いと思うことはたくさんある。しかし、

“頑張って働いた結果が、周りの人々の生活の基盤となる。”

それを知っているからこそ頑張れる。それこそが土木工事の最大の魅力であると筆者は考える。

5. 今後は…

現在は、社会人一年目で覚えなければいけないことが多く、先輩や現場の作業員さんに現場のことを教えてもらい、日々勉強している。忙しい毎日を送りながらも、大切にしていることが一つある。それは「常に自分自身の将来のイメージを持ち続けること」。これは、大学時代に講演会で聞いた先輩女性技術者の言葉である。今後、仕事や結婚、育児等で人生の岐路に立ったときに、後悔のない選択ができるよう、今は、目の前にある仕事に責任をもち、全力で取り組んでいきたいと思う。

JCMA

【筆者紹介】

大熊 汐里 (おおくま しおり)
五洋建設㈱
東北支店 みらい造船建設工事事務所

